

平成 15 年度東北大学附属図書館企画展

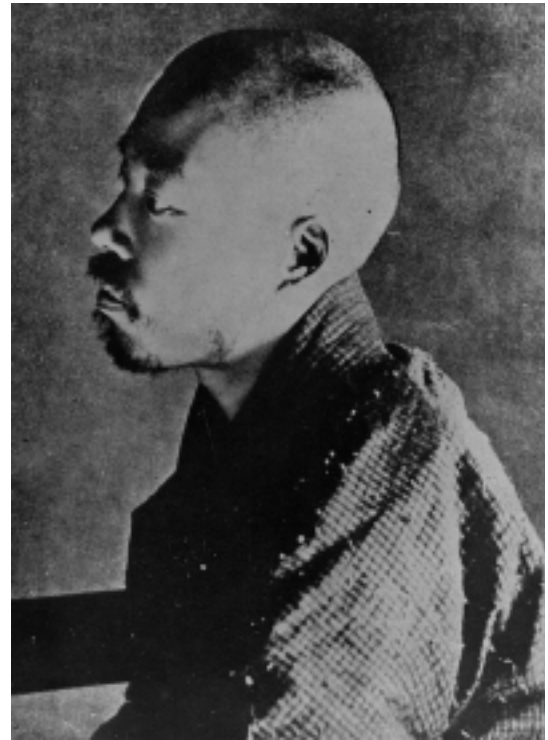
明治・大正期の文人たち

漱石をとりまく人々

夏目漱石の生涯と作品、朋友・正岡規との出会いと永訣、土井晩翠ら同時代の文人たちとの交流、小宮豊隆をはじめとする門下生との関わり...新収資料 20 点を含む、約 100 点の資料により、漱石と漱石をとりまく多彩な人々を紹介します。



夏目漱石



正岡子規

期 間： 平成 15 年 10 月 31 日（金）～11 月 9 日（日） 10 時～17 時
（10 月 31 日（金）は 14 時～17 時、会期中無休） 入場無料
会 場： 東北大学附属図書館本館大視聴覚室
講演会： 明治三十三年の漱石、子規、晩翠
講師 佐藤 伸宏 氏（東北大学文学研究科教授）
平成 15 年 11 月 2 日（日） 14 時～16 時 入場無料
東北大学附属図書館本館 2 号館会議室
記念講演会聴講の皆さまに、展示会図録（約 120p）を無料進呈

■第1部 漱石と子規

夏目漱石と正岡子規 傑出した文学的才能を持つ二人の比類のない盟友関係は、明治 22 年（1889）5 月、漱石が子規の文集に批評文を寄せたことから本格的に始まる。しかし二人の友情は、その始まりから既に永訣の予感を孕んでいたのではなかったか。同じ頃、子規は肺結核と診断され「余命十年」を覚悟したという。死と隣接する子規と、漱石の友情は、自ずと凝集されたものとなる。

漱石は、子規の影響により、漢詩文を作り、句作に励み、やがて子規門下の高浜虚子の勧めにより、子規と関係の深い雑誌「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を執筆した。小説家・夏目漱石が誕生する媒介となったのは、正岡子規であった。しかし漱石が小説を書き始める時には、子規は既にない。子規は、漱石が英国に留学していた明治 35 年（1902）9 月に亡くなったのだった。「何でも大将にならなけりや承知」せず、漱石を万事「弟扱ひ」にして憚らなかった子規。留学中の漱石へ「僕ハモーダメニナツテシマツタ」と書き送り、「僕ノ目ノ明イテイル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ」と漱石からの「倫敦消息」を心待ちにしていた子規。しかし、倫敦の下宿に閉じ籠り、「神経衰弱と狂気」に陥る程に「根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題」を解明しようと格闘する漱石は、さらなる「倫敦消息」を子規に書き送ることは出来なかった。子規の願いを聞き届けることが出来なかったという切実な思いは漱石の内に深い悔いとなって残ったに違いない。その思いから漱石は、『吾輩八猫デアル』中篇序に、子規への「往日の気の毒を五年後の今日に晴さう」と記した。だから『吾輩八猫デアル』は、子規の「霊前に献上」されたのである。

第一部では、夏目漱石と正岡子規の出会いと交流、子規の死から小説家・夏目漱石が誕生する過程を中心に、新収資料を交えて紹介する。

■第2部 漱石と同時代の文人たち

第二部では、漱石(1867-1916)と関係の深かった同時代の文人として、狩野亨吉(1865-1942)、中村不折(1866-1943)、土井晩翠(1871-1952)、ラファエル・フォン・ケーベル(1848-1923)そして魯迅(1881-1936)の 5 人を取り上げ、それぞれの主たる著作物と漱石に関連する資料等を紹介する。漱石と各人との出会いおよび影響関係等は以下の通りである。

狩野は漱石の生涯を通じて親しい友人で、その最初の出会いは漱石が松山へ赴任する明治 28 年の少し前であった。不折と漱石が知り合ったのは、明治 34 年(1901)の年で、子規を通じてのことであり、後に『吾輩八猫デアル』の挿絵を依頼されることになる。晩翠は漱石の東京帝国大学英文学科の後輩であるが、その出会いは晩翠がまだ第二高等学校在学中の明治 27 年(1894)で、漱石の松島旅行の途中のことであった。漱石が文科大学で一番人格の高い教授としてあげているラファエル・フォン・ケーベルとの出会いは、明治 26 年(1893)で、来日してすぐのケーベルが行った美学の講義においてであった。魯迅は明治 35 年(1902)国費留学生として日本を訪れたが、直接漱石と会ったかどうかは定かではない。しかし、医学を捨て、文学によって社会や人間の精神を改造する理想を持った魯迅は、明治 39 年(1906)の文芸活動に専念する頃から、明治 42 年 8 月の帰国までの 2 年あまりの間、高い関心を漱石に示しかつ影響を受けたことを生前魯迅自ら認めていたという。

■第3部 漱石門下と東北帝国大学

第三部では、漱石の門下生関連資料を中心に、東北帝国大学との関わりを示す資料をも展示する。

漱石を慕う多くの門下生たちの中で、仙台に足跡を記したのは阿部次郎と小宮豊隆である。彼らは、創設まもない東北帝国大学法文学部のスタッフに相次いで加わり、新たな日本文化研究の発信を担った。彼らの活動を反映する蔵書は、それぞれ東北大学に受け入れられ、特殊文庫のうちの阿部文庫、小宮文庫として納められている。この二つの文庫と、漱石の旧蔵書や新たに受け入れた資料の中から、漱石門下生の間での交流、および漱石門下生と東北帝国大学の教官たちとの交流を示す資料を選び、彼らの足跡をたどっていくこととしたい。

「漱石と仙台の関係」という疑問への答えは、この中から見えてくるだろう。